

日本地衣学会

No.52

ニュースレター

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目次	会員通信	181
	雲南地衣類調査行2005(その4) / 原田浩	181
	会務報告	183
	第2回秋田ワークショップ報告 / 山本好和	183

会員通信 From Members

雲南地衣類調査行 2005 (その4)

聞くところによると、北部とは違い雲南南部では道路が整備され、主な村へはちゃんとした道路が通じているのだという。李仙江の支流への道も、サイコロ状の石を敷き詰めた舗装だった。こんな山奥までよくぞ整備したものだという印象はあった。とはいえ緑春から思茅 Simao までは行程は遠く、一日がかりだった。私の研究テーマに沿った調査場所は見つからないので、樹皮着生の地衣類の調査を二三回繰り返すに止まった。

1月19日、思茅から北上し、お茶で有名になったプーアル普洱 Puer (本誌 51 号 p178, 図 2 を参照) に近くなると、濃霧となり、時に霧の合間から茶畑が覗いた。なるほど、日本で見るような茶畑に似ている。・・・ここで、地衣類から話を脱線させていただこう。

* * *

普洱 (Puer プーアル) 茶が、これほど日本で有名なものだから、当地が一大観光地にでもなっているのかと思っていたのだが、さにあらず。普洱はとても小さな町で、観光施設は全く無い。ジープを洗車している間、向かいにあったお茶屋さんに入り、王さんからお茶についていろいろと話を聞いた。それによると、普洱の人は、古茶(日本でいう普洱茶)をほとんど飲んでいなかったのだそうだ。茶の生産地から遠く離れたチベットや中国北部の消

費地に運ぶことで、古茶が生まれたのだそうだ。いっぽう、茶産地の雲南ではむしろ緑茶が圧倒的に好まれているのだ。かく言う私も緑茶好きである。せっかく普洱に来たのだから、おいしい緑茶を戴きたいではないか。幾つか試飲してみたが、特別なものは無かった。むしろ昆明のほうが品揃えが豊富である。拍子抜けしてしまった。しかし、せっかく普洱に来たのだからと記念に普通の緑茶を購入すると、「ここに来た外国人で、古茶を買わないのは、あなたが初めてだ」と文句をいわれてしまった。・・・雲南南部では各地で古くから茶が栽培されていて、普洱が別段有名だったわけではないのだそうだ。確かに霧深く、良質のお茶が採れることは事実のようであるが、日本でいわゆる普洱茶(つまり古茶)が有名になったのが最初で、そのブームを台湾が追従し、さらに他の地でも有名になっていったのだという。

無量山、哀牢山そして昌寧

景東 Jindong の街(本誌 50 号 p.173 の図 1 の地図を参照)は、西の無量山 Weiliang-shan の山並みと、東の哀牢山 Ailao-shan の山並みとによって挟まれた盆地にあった。1月20日は無量山へ、21日は哀牢山に行くことになった。



図1. 無量山の茶畑. ツノマタゴケモドキ *Everniastrum cirrhatum* が多い。

* * *

無量山では、谷川での岩上生アナイボゴケ科の地衣類調査がしっかりできた。幹線道路が越える峠の近くの稜線では、低木上に大型地衣がびっしりと生えていた。そこからさほど遠くないところに昔ながらの茶畑があった(図1)。やはり生えるものがちょっと違う。またもやツノマタゴケモドキが多い。

哀牢山では山頂近くにダムがあり、中国科学院昆明植物研究所のステーション(所属は既に別になっていた



図2. 哀牢山のダム付近の低木. ツノマタゴケモドキやイトゲジゲジゴケなどが多い。

が)がある。付近の森林内はよく湿っていて、私には面白かった。しかし、ちょっと一般向きではないので、林外に出て、二次林の低木林をご覧いただく(図2)。枝の各所に何やらもじゃもじゃしたものがたくさん見えるが、これは全て地衣類。代表的なのは、やはりツノマタゴケモドキ、それからイトゲジゲジゴケ *Heterodermia boryi*、更にアンチゴケ属もあったと思う。二次林でもこうなんだから、原生林だったら一体どうなんだろうと試してみたりもする。

旅はもう一息。景東から昌寧 Changning へ移動。小さな滝で良い獲物を得た。山の上は、ここでも荒れた二

次林になっていたが、大型地衣は多かった。昌寧から西の保山 Baoshan に出たから、高速道路を通り大理 Dali さらに楚雄 Chuxiong まで一気に。その翌日は、昆明。

夢の後始末

昆明に帰ってからも、決してのんびりはしていられなかった。約500点収集した資料を全て2分割する作業が待っていたのだ。一方を昆明植物研究所に、一方を千葉に、という約束である。

それから、昆明を発つ前のある人とした約束を果たす必要があった。その一人は、かの王さんであるが、もう一人は、Xiao Yue-Qin である。彼女は中国科学院の大学生なのだが、卒論として扱っていた。指導するのは、キノコ屋の劉さん。私は2つの原稿を旅の前に彼女から預かっていましたが、それを返さ

なくてはならない。王さんからも4つほど原稿を預かっていた。・・・約束を無事に果たし、私のほうはすっきりすることができた。一方、Xiaoさんは、王さん同様に韓国に留学するのだそうだ。王さんはXiaoさんを連れて、3月には、留学中の韓国に戻るようになっていた。

* * *

旅の間一緒だった二人、それからXiaoさん、・・・空港でこの3人に別れを告げた。・・・またいつか、雲南に戻ろう。（終わり）



図3. 王さんの研究室で。中央はXiaoさん。

（原田 浩：千葉県立中央博物館）

会務報告 Reports of the JSL Activities

第2回秋田ワークショップ報告 Report of the 2nd Akita Workshop of JSL

2003年8月に開催された本会第2回観察会に併設して開催された秋田ワークショップが好評だったので、第2回を2004年9月22日（水）から27日（月）までの6日間開催した。スケジュール概要は、22日に初級編講義（講師吉村本会会長、受講者13名）、23日（秋分の日）に第10回青空地衣教室「田沢湖」（参加者10名）、24日は培養実験編（講師山本、受講者8名）、25日は分析実験編（講師山本、受講者10名）、26、27日は遺伝子実験編（講師原氏、受講者8名）。遺伝子実験編は今回から新しく加わった。参加者は、鹿児島から宮本氏、愛媛から川又氏、東京から中西氏、埼玉から寺澤氏、山形から田邊氏、秋田から濱野氏と秋田県立大学学生7名の以上13名（講師を除く）であった。

ワークショップは、吉村会長の初級講義から始まった。パワーポイントによる講義と後半は顕微結晶法や呈色法など主に顕微鏡を用いた観察実験が行われた。参加者



図1. 懇親会のひとコマ。



図2. イワタケとエイランタイの酢の物。黒っぽいのがイワタケ、淡褐色（一部緑褐色）がエイランタイ。

のほとんどは地衣類の実質的な解説を聞くのは初めてのことなので真剣に聞き入っていた。夜は、懇親会（図1）ということで高知みやげの生節とイワタケとフィンランドみやげのエイランタイの酢の物（図2）を肴に地衣類の話で盛り上がった。

2日目は田沢湖での青空教室である。自家用車に分乗して秋田市内を出発、昼前に田沢湖畔に到着、田沢湖畔を北半周して、東西北の3地点で地衣類の生育を調べ、前日の勉強の成果を確かめ合った。

3日目は培養編、8名の参加者は4班に分かれて、午前中は孢子放出発芽実験、午後は組織培養実験に取り組んだ。クリーンベンチを使用した無菌操作であるので、

なかなか大変だった。

4日目は分析編、10名の参加者は午前中、地衣成分抽出操作と薄層クロマトグラフィー（TLC）、午後、高速液体クロマトグラフィー（HPLC）分析に取り組んだ。今回からフォトダイオードアレイ付きのHPLCであるので、成分同定が容易になった。文化財を汚損するキクバゴケのサンプルを持ち込んだ田邊氏は成果を得て大喜びだった。

5、6日目は遺伝子編。8名の参加者は、数十ミリグラムの地衣体から遺伝子の本体であるDNAを抽出し、PCR法によって2つの遺伝子領域をそれぞれ増幅し、電気泳動で増幅産物を解析した。その結果、増幅産物の大きさが異なることから、用いたサンプルの多様性を確認できた。

ワークショップで用いたテキストは入手希望者にお送りしますので、筆者あてご連絡下さい。

* * *

6日間の長丁場でしたが無事に終了し、昨年に続いて好評だったようです。2004年は国際学会などのため9月開催でしたが、2005年は8月下旬に開催を予定しています。興味がありましたら是非ご参加をお願いします。

（山本好和：秋田ワークショップ世話人）

●複写される方へ

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌42号148ページに。

●Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 42, p. 148 of this publication.

日本地衣学会ニュースレター 52号

発行日：2005年 4月 15日

編集：原田浩・岡本達哉・木下靖浩・棚橋孝雄
発行者・発行所：日本地衣学会

〒010-0195 秋田市下新城野

秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科内